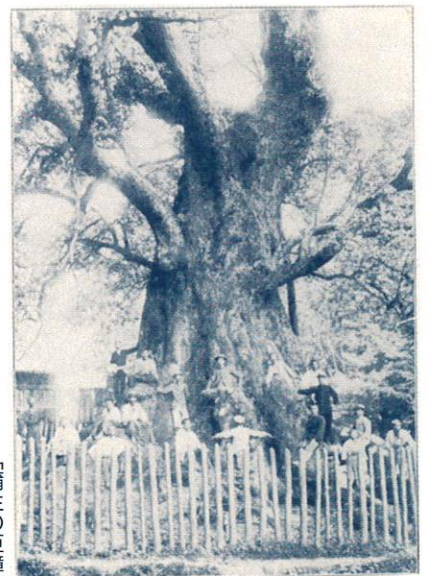


# 文化遺産・自然景観保護事業の初期資料

—— 論文記事及び写真・図版（六四〇点）を収録 ——

明治後期から大正にいたる産業発展の過程で、わが国も工業化による国土の開発が進み、文化的景観と記念物文化財は破壊の危機にさらされる。

この事態を憂慮した旧幕臣の侯爵徳川頼倫らは一九一一年、遺跡や自然を文化財として保護顕彰する事を目的に「史蹟名勝天然記念物保存協会」を発足させた。弊社では自然環境保護事業の原点といわれている同保存協会の会報『史蹟名勝天然記念物』の大正期の全巻、及び同協会が開催した講演会記録である『史蹟名勝天然記念物保存協会報告』を復刻刊行し、広く日本文化史・郷土史研究の基本資料として提供する。



「史蹟名勝天然記念物保存協会報告 第八回より」

「蒲生の巨樟」

史蹟名勝天然記念物保存協会 編 【復刻版】

# 史蹟名勝天然記念物

## 【大正編】

全3巻

附録1  
別冊1

体裁——A4判、A5判・上製本・総1、510頁

内容——史蹟名勝天然記念物 第1巻1号(大正3年9月)～第6巻5号(大正12年5月)

史蹟名勝天然記念物保存協会報告 第1回(明治44年11月)～第6回(大正6年2月)

※第三回は別発行のため、収録は全五冊。

## 史蹟名勝天然記念物

第一巻

自大正三年九月  
至大正六年十月

史蹟名勝天然記念物保存協会發行

別冊——解説(丸山 宏)・総目次・索引  
定価——本体揃価格 68,000円+税

2003年6月一括刊行

不二出版



# 『史蹟名勝天然紀念物』の復刻によせて

丸山 宏

## 近代日本文化財・文化景観保護関連年表

史蹟名勝天然紀念物保存協会が雑誌『史蹟名勝天然紀念物』の第一号を発刊したのは一九一四（大正三）年九月二〇日のことである。通号第七九号（第六卷第五号）まで刊行され、一時休刊となる。保存協会の発足は一九一一年（明治四十四）年一月に遡る。その趣意書には日露戦争後、国内産業の発展と裏腹に史蹟名勝天然紀念物破壊の危機を訴えている。保存協会の目的は史蹟名勝天然紀念物保存の啓発であり、その法制化であった。

保存協会は徳川頼倫を会長とし、副会長は実兄徳川達孝と東京市長阪谷芳郎、編集発行は戸川残花があつた。後、内務省が引き継ぐ。評議員には内務省から一本喜徳郎、床次竹二郎、井上友一などが名を連ね、内務省地方局が積極的に関わった。学術分野からは錚々たる学者の名が見える。植物学では三好学、白井光太郎、伊藤篤太郎、松村任三、動物学では渡瀬庄三郎、佐々木忠次郎、地質学では神保小虎、井上禧之助。また、名勝関係では造園学の本多静六、建築学では伊東忠太、関野貞。歴史学では三上参次。人類学・考古学では坪井正五郎。ジャーナリズムでは徳富蘇峰、坪谷善四郎等が在る。

雑誌『史蹟名勝天然紀念物』の特色を見ると、そこには専門分野を越えて学際的な視野で保存運動を支えた豊富な人脈の存在がある。それは明治以降創設された草創期の学術界のダイナミズムも感じられる。『史蹟名勝天然紀念物』刊行の基礎には国民全般への啓発を射程に入れ、近年の環境保護運動とも一脈通ずるものがある。近年、国際的な高まりを見せている世界遺産条約と合わせると、現代のアカデミズムが世界遺産保護の評価基準を設定していることの類義性も見て取れる。『史蹟名勝天然紀念物』を多方面の分野から再考することは今日的な課題とも言えるのではないだろうか。なお、本復刻版は休刊になる通号第七九号までのものである。



「阿里山の神木」



「対馬産のしるべ」

- 一八七一年 「古器旧物保存方」 布告（明治四年）
- 一八七八年 フェノロサ米日
- 一八八八年 「臨時全国宝物取調局」 設置 宮内省
- 一八八九年 志賀重昂「日本風景論」 刊行
- 一八八九年 奈良帝國博物館開館
- 一八八九年 内務省に古社寺保存会設置
- 一八八九年 「古社寺保存法」 制定
- 一八八九年 帝國古蹟取調会発足
- 一九〇九年 南葵文庫において史蹟史樹保存に関する茶話会
- 一九一一年 徳川頼倫等貴族院に「史蹟及天然紀念物に関する建議案」 提出
- 一九一一年 史蹟名勝天然紀念物保存協会発足
- 一九一四年 「史蹟名勝天然紀念物」 刊行開始（大正三年）
- 一九一九年 「史蹟名勝天然紀念物保存法」 制定 庭園協会創立 機関紙「庭園」 刊行開始
- 一九二三年 「史蹟名勝天然紀念物」 五月休刊 関東大震災
- 一九二六年 「史蹟名勝天然紀念物」 再刊 内務省地理課
- 一九二九年 史蹟名勝天然紀念物保存協会文部省に移管（昭和四年）
- 一九三三年 「国宝保存法」 制定（古社寺保存法は廃止）
- 一九三四年 「国立公園」 刊行開始（国立公園協会）
- 一九三三年 「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」 制定
- 一九三四年 風景協会創立 機関紙「風景」 刊行開始
- 一九三五年 和辻哲郎「風土 人間学の考察」 刊行
- 一九四五年 敗戦
- 一九四九年 法隆寺金堂火災
- 一九五〇年 「文化財保護法」 制定

●内容見本（原本の93%縮小）『史蹟名勝天然紀念物』第三号より

# 史蹟名勝天然紀念物

月一十年三正大 行 發 日 十 二

東京市麻布區 飯倉町南葵文庫内 第貳號 史蹟名勝天然紀念物保存協会輯

## 國體の精華と史蹟名勝天然紀念物

伯爵 徳川達孝

(上)

史蹟といひ、名勝といひ、天然紀念物といふ。何れも我邦郷土の美點特色を發揮すべき、特有の寶とすべきものなり。史蹟は無言にして、歴史を語る。我邦の如き國史の上に建てられ、鴻蒙の昔より、君臣の義定まり、忠誠の念固くして、二千五百有餘年を一貫の大精神の、間断なく邦土の上に流され、民族の間に満ちたる、百鍊精金の如き國體は、世界に其比類なきこと、恰かも地球何れの部分に於ても、歴史何れのページに於ても、一種莊嚴にして而かも優美なる國名の、唯一あつて、更に一あるを見得ざると一般也。

國は舊し。歴史は久し。全國到處に史蹟の存するは、一として我邦國體の發揚大成せられたる軌跡を語る、各自好箇の一基石ならざるなし。皇居行宮の址、明君賢相の跡、忠烈義勇の迹、孝子節婦の閭里、名匠達人の手澤、其人其事既に史乘を照らすもの、其址其迹亦人をして感奮興起せしむる多し。間断なく邦土の上に流され、民族の間に満ちたる大精神を、自から感應せしむるものは、即ち此無言の史蹟に如くものなし。

古墳も亦、民族發展の有史以前を語る、重要な遺物たり。史學研究の必要資料たるのみならず、是れも亦我邦の大精神たる、祖先回顧の念に、自から根柢ありしむ。若し其名を用ゆることを許せば、史蹟も亦史蹟、古墳も、同一の感化を永遠に力あらしむ。芳野の櫻、よし後醍醐天皇當時の遺樹にあらずとも、其樹の遺種ならば、亦所謂史樹たるを失ざるべし。況むや幾百年を経て、尙ほ依然として其地に開展せられた

る史蹟の紀念標たる如きものをや。此の如き純然たる史樹にして存するならば、其史蹟と共に、其史樹の重なるべきこと、固より言を待たざる所なり。

(中)

名勝の我邦に多きこと、一に山川風土の美自から然



しむる所ならずむばあらず。風景は、名勝の實質也。されど神話、史蹟、詩歌、文藻の結び付けるに及んで、花あり實あり、色と香と亦其中に含ませられ、名勝乃ち大成せらる。

我邦國民性の清白にして爛熳、忠烈にして優美なるは、其れ如何にして涵養せられたりしか。天然の感化より強きものなしとせば、風景の人心に映發せる印象

氣、常に風景絶美の名區、文藻喧傳の勝地に存す。其我邦國民性の陶冶に於て、今に其効力を發揮しつゝあるは、何人も親しく此の如き地區を踏むて、自から感應する所たるべし。

然らば名勝や、單に人の心目を娛ましめ、疲勞を慰藉して、更に清新の生氣を蘇かへらしむるの効あるのみならず、品性の陶冶、國民性の涵養に於ても、亦自

(下)

から我邦一貫の大精神に寄與する所多し。

天然紀念物は、主として學術上比類なき性質のものなを貴ぶ。されど我邦に存して、他の邦土に多く其類を見ざる物の如きは、其植物たるも、動物たるも、將た礦物たるも問はず、これ亦我邦の特長として誇るべきもの、單に學術上の必要より之を言ふべきのみならず、我特長の保全發揮より之を言ふも、價値の如何に大なるものあるかは、多く言ふまでもなき所也。

我邦古來の大精神として、我れの國光を海外に發揚することは、單に武功の上にてのみならず、文化の上にて、亦夙に之を其第一義となせり。學術上我邦獨り有る所を以て、世界共通の參考に供し、學界の一貢獻を實にする如きは、進んで文明の惠澤に寄與する、最も尊貴の一使命たるべし。此點より考ふれば、物其ものは、たとひ如何に輕微なるもの如きも、其學術上に於ける價値よりして之を考へ、殊に其貴き所以を知らざるべからず。

知らざれば、尋常一様の葉あり枝あり、幹あり根ありの一老樹也。されど世界になくして、獨り我邦に此木ありと聞かば、争でか其尊きを感じざるべき。若しくば動物、礦物の類にして、一羽も、一岩層と雖も、苟くも此種貴重物の物たる以上は、之が種族の絶滅以前に於て、之が現状の變改以前に於て、よく之が保存を完うし、其眞價を發揮するは、直ちに是れ世界文明に寄與すべき、正當の行爲たるべきを信す。況むや一種の動植物を保存養殖せしむるが爲めに、國産の一を加ふべき望みある如きに於てや。文明世界に對する使命よりいふも、國益を興する端を啓く上よりいふも、之が保存の如何に急務たるかは、昭として明か也。

文明の物質事業は、時々刻々此等の埋滅破壊を促がして已ます。而かも一たび失へば、再びすべからざるもの、比々皆然り。誰か保存事業を閑事業といふや。



第壹卷總目次 自第二十六號

Table with 3 columns: 論説及記事 (Editorial and Articles), 頁 (Page), 號 (Number). Lists various articles and their authors.

Table with 3 columns: 神奈川縣 (Kanagawa Prefecture), 頁 (Page), 號 (Number). Lists articles for Kanagawa Prefecture.

先帝御遺蹟(承前)

Table with 3 columns: 東京府 (Tokyo Prefecture), 大阪府 (Osaka Prefecture), 新潟縣 (Niigata Prefecture), 埼玉縣 (Saitama Prefecture). Lists articles for various prefectures.



『史蹟名勝天然記念物保存協会報告』第一号より

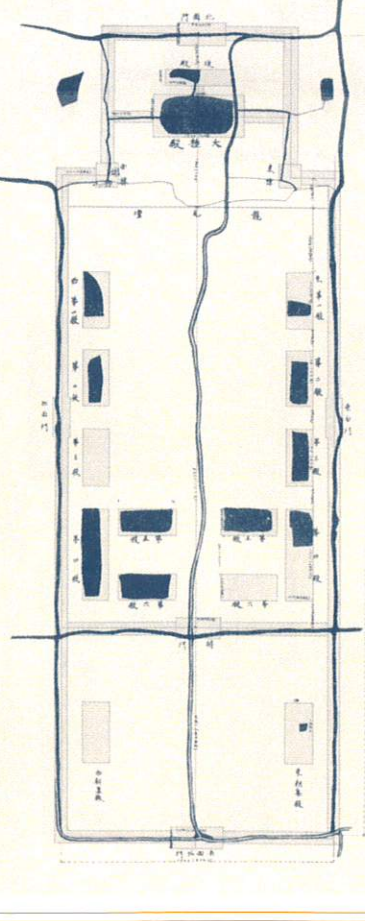
『東京小石川名荷谷深光寺馬琴の墓前(史蹟調査の一行)』

向かって右より 伊藤篤太郎・戸川安宅・坪谷善四郎・福田有作・橋井清五郎・目賀田種太郎・徳川頼倫・三好学・国府種徳・瀧澤静雄(馬琴曾孫)・坪井正五郎・徳川達孝(明治44年5月27日撮影)

史蹟名勝天然記念物保存協会 名簿(大正三年九月現在)

Table listing members of the Association, including names, titles (e.g., 会長, 幹事, 評議員), and professions (e.g., 理学博士, 工学博士).

平城宮朝堂院址跡圖



『史蹟名勝天然記念物保存協会報告』第四号より



◎本書を推薦します

## 同時代の文化的状況をうつつしだす貴重な資料 荒山 正彦

『史蹟名勝天然紀念物』（大正編）が復刻されることになった。この雑誌の刊行期間は、日本最初の外国人観光客向けの旅行案内所であるジャパン・ツーリスト・ビューロー（現在のJTBの前身）の創設（明治四五年）や旅行雑誌『旅』（大正一三年）など、日本において観光や旅行をとりまく状況が大きく変化した時代である。

近年における世界遺産の例をみるまでもなく、史蹟などの歴史的な遺産や、名勝などのすぐれた風景地、そして天然記念物などの特異な自然の事物は、観光や旅行にとって格好の目的地となってきた。今回復刻の対象となった大正期の史蹟・名勝・天然記念物をめぐる状況も同様であった。これらの「文化財」は、その当初から、学術的な価値ばかりではなく、一般大衆が見学し経験する対象として大きな価値を有していた。したがって、具体的な史蹟・名勝・天然記念物からは同時代の歴史認識、風景観、自然観が浮かびあがる。一方で、それらのものをめぐっては地元や郷土において保存運動が展開された。そうした大正期の社会や文化の仕組みそのものも、ここには映しだされる。

また、個別の史蹟・名勝・天然記念物指定へ向けて、各専門の委員達による全国各地の実地調査があった。柳田国男らによる民俗の記録収集や、柳宗悦らによる民芸の記録収集などと同じく、全国各地におけるこうした調査の軌跡も、ここには記録されている。今回復刻された『史蹟名勝天然紀念物』（大正編）は、文化財関連の分野だけではなく、観光研究をはじめ日本研究や郷土研究にとってもたいへん貴重なものとなるだろう。

あらやま まさひこ 関西学院大学 助教授

## 文化遺産保全の原点

上田 正昭

「文化財保護法」が制定されたのは、昭和二五（一九五〇）年の五月三〇日であり、その施行は同年の八月二九日からであった。この法律が制定される直接の契機になったのは、前年一月二六日の法隆寺金堂壁画の焼失であった。

現行の「文化財保護法」でも史蹟名勝天然紀念物などの指定とその保存が重要な事項となっているが、その原点は大正三（一九一四）年の九月から出版が開始された『史蹟名勝天然紀念物』にあった。史蹟名勝天然紀念物保存協会のこの事業は画期的であり、大正八年制定の「史蹟名勝天然紀念物保存法」の制定にさきだつ貴重な調査報告書であった。

文化遺産の保護とその活用のありようが改めて問い直されつつある昨今、大正三年九月の第一巻一号から大正二年五月の第六巻五号までを『史蹟名勝天然紀念物』（全三巻・附録一・別冊一）として刊行されることはきわめて有意義である。保存とは有形・無形の文化財をそのままに放置することではない。文化財を守りかつ活かすことが肝要である。大正期の原本は今日入手がきわめて困難であつて、その復刻は必ずや日本の文化遺産の保全に寄与するにちがいない。

うえだ まさあき 京都大学名誉教授 文学博士

## 銭貨出土集成と『史蹟名勝天然紀念物』

栄原永遠男

京都大学の大学院の一時期、私は、ほとんどの時間を、自分の所属する国史研究室ではなく、考古学研究室の書庫ですごしていた。この書庫には、それこそ報告書や雑誌がうなつていた。もちろん日本でも指折りの蔵書である。私は、そこに立入りを許され、日本古代銭貨の出土例を集めるのに没頭していたのである。薄暗くかびくさく荘厳で、冬は体の芯まで冷え込む書庫内は、ときおり検索に院生や学生が入ってくる以外は、静寂そのものであった。

このような書庫内での苦行に際して、戦前の出土例を探すときに私が頼りにしたのが、『考古学雑誌』や各府県の県報とらんで、『史蹟名勝天然紀念物』であった。当時、出土例の集成は、すでにいくつか発表されていた。しかし、それらはおおむね、古い集成をそのまま引き写し、それにいくつかの出土情報を付け加えた程度のものであった。私はそれに飽き足りず、一から集成し直そうという無謀なことを思い立ち、上記のような仕儀となったのである。

どこで出土があつたのか、そんなことは五里霧中である。ただやみくもに報告書を端から順番に見ていくしかない。そこで『史蹟名勝天然紀念物』のページを繰っていくと、全国の史蹟その他に関する動向や遺物に関する情報が見えてくる。それをたよりに、その地域や時期の報告書を検索するのである。多くははずれ。しかし、たまにこれまで知らなかった出土の事実を突き止めることができる。そんなとき、私は『史蹟名勝天然紀念物』に感謝した。その『史蹟名勝天然紀念物』が復刻されるという。なつかしく喜ばしいかぎりである。

さかえはら とわお 大阪市立大学 大学院文学研究科 教授

## 文化財・自然に関する文化史的研究の宝庫

羽賀 祥二

一九一九年史蹟名勝天然紀念物保存法の制定をきっかけに、日本における文化財・自然の保存事業は本格化した。その概要を理解することができるもつとも重要な史料が『史蹟名勝天然紀念物』である。法規の解説はもとより、保存の理念・イデオロギーの主張、保存の方法などきわめて重要な論考が毎号掲載され、当時のこの問題に関する熱気ある雰囲気うかがえる。国民精神、郷土や自治という観念と関連させて、保存事業の意味を解説した多くの論説のなかに、文化財の価値序列のあり方を確認できる。

論説に加えて、各地の文化財・自然・風景の調査報告、中央と地方での保存運動の動向は「協会月報」欄で、各道府県での史蹟名勝天然紀念物の指定の動きは「公報彙纂」欄で知ることができる。その他協会が主催して毎月おこなわれた見学旅行会の記録、各地の保存・顕彰事業・後援会などの動き、新刊紹介もあり、その内容は多彩である。まさに中央と地方での文化財をめぐる動向を知る恰好の資料だといえよう。

西欧の保存事業からの影響ということも、解明が待たれる大きなテーマの一つであろう。日本も同時代的にこの動きに反応していた。この雑誌の復刻が二〇世紀初頭の世界的な文化財・自然保存の動向を振り返り、その意味を考え直してみる礎石の役割を果たすことは間違いないと思う。

史蹟名勝天然紀念物保存協会の会長であった徳川頼倫は「保存事業の恩人」と評されていた。頼倫は紀州徳川家の出身である。紀州には『紀伊続風土記』と『紀伊名所図会』がある。こうした優れた文化政策の成果が近代の保存事業にどのように受け継がれたのだろうか。この雑誌に見える頼倫への賛辞からそうした問題を考えてみたいと個人的な興味もひかれる。全国各地での郷土史の歴史を振りかえろうとするとき、この雑誌に盛り込まれている情報が多く示唆を与えてくれるだろう。

はが しょうじ 名古屋大学 文学研究科 教授

「史蹟名勝天然紀念物保存協会報告」第八回より



「法隆寺伽藍」

「史蹟名勝天然紀念物保存協会報告」第一回より



「東京華族会館表門」

「史蹟名勝天然紀念物保存協会報告」第四回より



「田子浦ヨリ見たる富士」



史蹟名勝天然紀念物保存協会 編〔復刻版〕

# 史蹟名勝天然紀念物〔大正編〕

全3巻

附録1  
別冊1

◎概要—A4判、A5判・上製本・総1、510頁

- ◎収録内容
- 第1巻—史蹟名勝天然紀念物
  - 第2巻—史蹟名勝天然紀念物
  - 第3巻—史蹟名勝天然紀念物
- 附録—史蹟名勝天然紀念物保存協会報告 第一回～第六回（明治四四年一月～大正六年二月）
- 別冊—解説・総目次・索引
- ※第三回は別発行のため、収録は全五冊。

◎解説—丸山 宏（名城大学教授）

◎別冊—解説（丸山 宏）・総目次・索引  
これのみ分売可〓本体価格1、000円＋税  
ISBN4-8350-4407-X

◎原本提供—『史蹟名勝天然紀念物』明治大学図書館

『史蹟名勝天然紀念物保存協会報告』東京芸術大学附属図書館

◎推薦—荒山正彦・上田正昭・柴原永遠男・羽賀祥二

◎定価—本体揃価格988,000円＋税 ISBN4-8350-4402-9

◎2003年6月一括刊行



〔対馬産かかし（き）〕

※継続予定〓『史蹟名勝天然紀念物』〔昭和編〕

## ◎関連図書

日本建築協会発行（大正六年～昭和三〇年刊）〔復刻版〕

## 建築と社会 全87巻・別冊1

本体揃価格1、540、000円

本誌は、『関西建築協会雑誌』、『日本建築協会雑誌』を前身とし、現在に至るまで発行されている。今回の復刻版は、大正六年九月の「創刊号」から、昭和三〇年二月の「第三六巻一・一二号」までを収録する。「建築は社会とともに発展する」という観点にたち、建築技術のみならず、都市・住宅・防災等、まちづくりに関する法制、社会経済、国民生活、調査研究など多彩なテーマを論じ、時代とともに変遷してきた本誌は、まさに日本近代史の縮図である。

A5判・B5判・上製・総39、000頁・別冊1解説（山形政昭）・総目次・索引  
●推薦〓足立 孝・金多 潔・佐野正一・塚本猛次・東畑謙三

表示価格は、全て税別

# 不二出版

〒113 0023 東京都文京区向丘一丁目二二  
TEL 〇三―三八―二四四三三  
FAX 〇三―三八―二四四六四  
振替 〇〇一六〇一―九四〇八四